

# 第32期第7回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



生涯学習のマスコット  
「マナビィ」

平成29年3月17日（金）午前10時～正午、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）で、  
第32期京都市社会教育委員会議の第7回目となる会議が開かれました。

会議の模様をわたくしマナビィがレポートします！

## 出席委員（17名のうち12名）

五十音順

井上 満郎 委員，奥野 貴史 委員，佐伯 久子 委員，齊藤 修 委員，白井 皓大 委員，  
鈴鹿 可奈子 委員，鈴木 ちよ 委員，園部 晋吾 委員，西脇 悦子 委員，橋元 信一 委員，  
森 清顕 委員，吉川 左紀子 委員

## ■ 開会〔井上議長〕

### ■ 議事－1 生涯学習総合センターの今後の事業展開について

（事務局から）

- 生涯学習総合センター（京都アスニー）では、生涯学習振興財団の自主財源で運営する自主事業と、京都市からの受託事業の2種類の事業を展開しています。本日は、全事業の約6割を占める自主事業を中心に、実績が上向いている事業及び課題を抱えている事業について御説明します。
- 実績が上向いている事業には、「アスニーセミナー」（様々なテーマについてより専門的に学ぶ教養講座）と「アスニーコンサート」（プロの演奏を気軽に楽しめるコンサート）があります。これらの事業は、単発の事業で受講者が参加しやすく、また、民間のセミナーなどと比較しても安価（620～820円）で質の高い講座を受講できるため、値段と内容の両面で好評を得ています。
- 一方、課題を抱えている事業には、「アスニーアトリエ」（第一線で活躍する講師の指導のもと、基礎からしっかり学べる実技講座）と「アスニーコーラス」があります。これらの講座は、継続して取り組んでいただくもので、受講者の固定化や高齢化が課題です。これらの課題に対応するためには、運営方法などを見直す必要がありますが、その際は、地道な活動で一定の成果を挙げてこられた既存の受講者や、熱心に御指導いただいている指導者への配慮が求められます。
- 今後の事業展開については、まず、文化庁の京都への全面的な移転など、旬な話題をテーマに取り込んだ事業を企画していきたいと考えます。次に、年金支給開始年齢の引上げや減額など、現在の利用者の中心であるシニア層の生活に直結する外的要因もありますので、新たな年齢層を対象を絞り込んだ事業を企画していきたいと考えています。また、課題を抱えている事業については、企画力を高め受講者の満足度を上げることができるよう改善を試み、それでもなお、継続が困難な事業については、見直しを検討してまいります。
- さらに、近年では、近隣の小学校や中学校と連携した取組を行っていますが、今後も、京都アスニーが長年の取組で築いてきた財産を大切にしながら、大学や他の機関との連携を強化するなど、新しいことにも取り組んでまいりたいと考えています。

京都アスニーには、セミナー受講料が割引になる「京都まナビすと」会員制度があり、多くの方が会員登録をされて受講されています。セミナーだけでなく、アスニーコンサートの割引など、他の特典もありますので、是非、御登録ください！



○ 井上 満郎 議長（京都市歴史資料館長，京都市埋蔵文化財研究所長，京都産業大学名誉教授）



生涯学習の場を提供している機関は、最終的には経営の問題になるのですが、それ以外にも、官民間問わず様々な課題を抱えています。これらの課題には、人口が減少していることや、講座の受講形態が「会場に受講しに出かける」という形態以外にも多様化していることなど、様々な流動的な要素が関係していると考えられます。

○ 齊藤 修 委員（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

まず、公的な機関が提供する講座は、民間のカルチャーセンターなどに比べ、安価な料金で受講でき、市民にとって貴重な場であるといえますので、今後も市民が安価で気軽に受講できる敷居の低い場として、取組を充実させていただきたいです。ただ、収益を挙げながら公的な役割を果たすというのは、経営的に、非常に難しいのも事実です。もし、経営健全化のために、受講者の年齢層拡大など、新しい分野を開拓するのであれば、入念な事前調査など、受講者層のニーズをしっかりと把握することが大切になります。



次に、「アスニーアトリエ」や「アスニーコーラス」については、メンバーの固定化が課題となっているようですが、例えば、「卒業制度」を導入してはいかがでしょうか。講座では基礎を学んでもらうというように、受け身で学ぶだけでなく、学んだことを活かして自主的に学び続けるという仕組みができれば良いと考えます。

最後に、今後の事業展開の中で他機関と連携される際は、大学だけでなく、出前講座などの活動を精力的に実施している新聞社などメディア各社との連携も深めていただきたいと思います。また、一番大事な学びの場は、やはり、実際に会場に出かけて講義を受講することですが、近年は、様々な受講形態がありますので、例えば、講座のインターネット配信など、会場に足を運ばなくても安価で受講できる方策の検討も必要だと考えます。

○ 井上 満郎 議長

京都アスニーの講座は、確かに敷居が低い、それを可能にしている要素の一つが安価な受講料なのでしょう。民間のカルチャーセンターの1/5程度の値段で開講しているのであれば、もっと受講者が増えても良いような気もしますが、受講料の面も含め、民間事業者との棲み分けという点では、どのようにお考えですか。

（事務局から）

棲み分けというよりは、民間事業者と京都アスニーとで情報を共有しながらお互いの事業を展開していくことで、相乗効果が得られれば良いと考えています。

○ 白井 皓大 委員（市民公募委員）

受講生を増やすためには、各講座の内容充実や外部との連携も大切ですが、既に受講されている方々同士の交流もすごく大事だと感じています。受講者同士の交流が深まれば、何回も足を運んで受講されますし、連続講座などを受講されている方が、別の講座に興味を持って参加されることもあるのではないのでしょうか。京都アスニーでは貸館事業もされていて、そこでは、自主的なサークル活動も行われています。「京都アスニー文化祭」を交流の場として捉え、文化祭での発表や運営を通じて、利用者同士のつながりができていくという事例も聞きますが、利用者同士の連携を深める機会について、どのようにお考えですか。



## (事務局から)

年に1度開催する「京都アスニー文化祭」は、京都アスニー利用団体による学習成果発表の場であり、講座受講やサークル活動で来館される方々が、他の講座や活動について知っていただく機会になっています。文化祭開催にあたっては、各講座の受講者や、貸館事業を利用して継続的に活動されている団体の皆様に広くお声かけをしています。

### ○ 鈴木 ちよ 委員 (市民公募委員)



京都アスニーは、市内中心部の主要駅から少し距離があるため、勤労者層が仕事帰りなどにアクセスするのは難しいと感じます。若い世代の人たちの学びに関しては、既に民間事業者が多様な形態のものを提供していますので、京都アスニーでは、従来どおり、シニア層の学びの場をきちんと確保していくことが、非常に意義深く、また、大切なことなのではないでしょうか。

### ○ 西脇 悦子 副議長 (京都市地域女性連合会相談役)

京都アスニーは、ある程度年齢を重ねた方が、「あのとき学んでおけばよかった」と思う京都の歴史や伝統などについて学びを深めることができる、シニア層にとっての絶好の学習の場であると感じています。



また、私たちも地域女性会のサークル活動でコーラスに取り組んでいますが、メンバーが固定化すると新しい方が入りにくくなり、続けておられた方も加齢を理由に退団され、結果としてメンバーが減るといふ、「アスニーコーラス」と同様の課題を抱えています。いくら人数が減っていても、既に活動されている方々が上達されていて新たに入りにくいという声も聞きますので、先ほど提案のあった「卒業制度」などの新しい制度を作り、グループをレベル別に細分化するなどの工夫をされれば、新しいメンバーが増えるのではないのでしょうか。

### ○ 橋元 信一 委員 (日本労働組合総連合会京都府連合会会長)



今年の2月から「プレミアムフライデー」(毎月末金曜日に仕事を早めに終え、普段とは違う生活の豊かさを楽しむことを奨励するキャンペーン)が始まりました。日本労働組合総連合会では、勤労者を対象に、この取組について調査をしたところ、多くの中年層の方が、この制度を利用してできた時間を活用して、自身のスキルを上げるために何かを学びたいと回答しています。この新制度を利用して、中年層の学びの意欲に応える事業を展開されれば、受講者層の拡大にもつながるのではと考えています。

### ○ 鈴鹿 可奈子 委員 (株式会社聖護院八ツ橋総本店専務取締役)



私自身が習い事をしていることもあり、私と同年代、あるいは、もっと年下の世代の方から、習い事を始めたいという相談をよく受けますが、その時に提示される条件は、平日の19:00以降、または、土日に通えるということです。働く世代にとっては、仕事が終わってからでも通える、または、仕事の都合などで休む可能性が少ない時間帯でないと、学び始めるのは難しいですし、私がこれまで通ってきた習い事も、全て20:00以降に開講されるものでした。しかし、京都アスニーの講座は、最も遅い講座の開始時間が18:30であり、働く世代が受講できる時間帯ではありません。今後、このような層を取り入れたいのであれば、受講開始時刻の設定を19:00以降や土日にすることを検討するべきでしょう。

### ○ 佐伯 久子 委員（京都ユネスコ協会会員）

私は、地域女性会でサークル活動をしています。どのサークルも20:00から始まります。18:30や19:00開始となると、「仕事から帰るのが遅くなった」「夕食の支度をしなければならない」などの理由で欠席者が増えますが、夕食やその片付けが終わった後の20:00開始なら、皆さん参加しやすいようで、継続して活動されています。



また、先ほど「卒業制度」の提案がありましたが、老人福祉センターでは、これに似た取組を実施されています。ここでは、1年間は将棋や手芸など様々な教室が無料で受講でき、1年が過ぎると同好会という形で自主的に学びを深めていきます。その際、センターでは、活動の場を提供するなど、自主的な学びの支援をされています。一度始めたことを継続して学びたいという受講者の声もありますので、京都アスニーでも、このような学びのあり方を検討されてはいかがでしょうか。

### ○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授・センター長）



シニア層が「元気に楽しく生きがいをもって生きる」という視点から、健康に関わることのみならず、芸術や学びによる生きがいづくりが重要になりますが、大学にはそのためのアイデアを持った先生方がたくさんいます。例えば、京都大学の医学研究科人間健康科学部の40代・50代の先生方は、積極的に地域に出て、地域コミュニティの中で、仲間と一緒に楽しみながら運動能力を維持する活動の大切さをお伝えしています。また、京都には芸術系の大学が多くあり、多くの先生方が、市民と一緒にアート活動を展開されるなど、様々なアイデアを持って日々活動されています。さらに、京都にはたくさんの学習資源があり、それらを多様な観点から研究されている先生方もいます。このような豊富な知識とアイデアを持つ大学の先生方に、シニア層向け講座の企画立案に協力いただければ、これまでになかったテーマを発掘できるかもしれませんので、京都アスニーからも積極的に大学や大学の先生方にアプローチをされると良いでしょう。

### ○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人）



まず、長年続き成果も挙がっている「ゴールデン・エイジ・アカデミー」のような事業は、引き続き実施されると良いでしょう。実施日が固定されていたり、テーマが高齢者向けになっていたりしますが、これに替わる600人規模の集客が見込める事業は、そう簡単にできるものではありません。現在の受講者数を維持できるよう工夫しながら実施いただければと思います。

次に、事業の予定表を見ると、空いている曜日や時間帯がたくさんありますので、それらを少しずつ活用して、今後、若い世代を取り込むための新しい試みを実施されてはどうでしょうか。その際、大学のゼミ生やサークル活動をする学生たちに、講座の企画・運営に携わってもらうなど、大学と連携すると面白いと考えています。新しい試みを繰り返すことによって、次代の「ゴールデン・エイジ・アカデミー」のような、柱となる事業が誕生するかもしれません。既存事業を変えようとするのではなく、新しい要素を少しずつ入れていくという発想が、今後の京都アスニー事業自体の活性化につながる気がします。

最後に、「アスニーアトリエ」や「アスニーコーラス」について、受講者層を広げるという観点からも、講座のタイトルに工夫が必要だと感じました。現在のタイトルでは、内容が分かってもしレベルまでは分かりません。タイトルのあとに「入門編」「中級編」「上級編」などのレベル分けをするだけでも、受講を希望される方々にとって敷居が下がり、ひいては受講者層の拡大につながるのではないのでしょうか。

## ○ 森 清頭 委員（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



講座の一覧を見ますと、例えば、お茶であれば「午前コース」と「午後コース」としか記載がなく、初心者の方は、受講できるのかどうか悩まれるのではないかと感じました。また、意外とフィールドワーク系の講座がなく、講座全体が会場に来てもらうことを前提に企画されている気がします。京都アスニーが、市内中心部からだとして少し不便な場所にあるのなら、逆に、出張講座をしてみてもいいかでしょうか。例えば、東山三十六峰の山々をハイキングしながら、そのあたりの土地の歴史や地形について学ぶフィールドワークがあれば、これまでとは違った年齢層にアプローチできるのではないかと考えます。

経営面では、財政基盤を強化していくために、まず、部屋の稼働率を高めることを考慮いただきたいと思います。さらに、現在は受講者数が少なくても開講されている講座があるようですが、採算ラインは必ずありますので、例えば「何人以上でないとは開講できません」と明示したうえで、その条件を満たさない場合は開講しないという決断も必要でしょう。

## ■ 報告一 国際博物館会議（ICOM）京都大会2019京都推進委員会の開催について



### （事務局から）

- 平成31（2019）年に日本初開催となる国際博物館会議（ICOM）京都大会は、京都の美術館や博物館の振興・活性化を図り、京都の魅力を国内外に発信するとともに、翌年に開催される東京オリンピック・パラリンピック大会の機運を一層盛り上げる絶好の機会となります。
- 大会に向け、国レベルでは、平成28年6月に大会運営を担う組織委員会が発足していますが、平成29年1月、京都市、京都府、京都商工会議所を中心としたオール京都体制からなる京都推進委員会が発足しました。
- 今後は、京都推進委員会を中心に、市民が博物館に親しんでいただけるイベントを実施するとともに、京都の魅力を国内外に広く発信するなど、大会の成功に向けた取組を進めてまいります。



国際博物館会議（ICOM）は、世界中から博物館の専門家が一堂に会する3年に1度の世界大会。京都大会は、2019年9月1日～7日に開催されます。

## ■ 報告二 中高生による「京都・観光文化検定試験3級」チャレンジ事業の実施結果について

### （事務局から）

- 京都市では、京都はぐくみ憲章の理念のもと、平成18年度から全市立小学校で取り組んでいる「ジュニア京都検定」を通じた学びを深化させるため、京都商工会議所と連携し、市立中学生が「京都・観光文化検定3級」に無償で受験できる機会を平成26年度に創設しました。昨年度からは、タクシー事業者の御支援を活用し、公立・私立の垣根を越えて、希望する中学生・高校生に受験の機会を広げており、今年度で3年目を迎えました。
- 今年度は706名が受験し、58名（中学生35名・高校生23名）が合格しました。合格者の内訳は、中学生（1年生10名・2年生16名・3年生9名）、高校生（1年生11名・2年生12名）となっています。また、保護者も子どもたちと一緒に勉強し受験いただく親子受験も奨励しており（保護者は受験料有料）、受験された保護者34名のうち26名が合格されました。
- 協力いただいた学校には、結果や分析についてフィードバックを行い、次年度以降の受験奨励を呼び掛けていくほか、事業者にも継続した御支援をいただきながら、取組を続けてまいります。

## ■ 報告-3 平成29年度「教育予算(案)の概要」について

(事務局から)

「教育予算(案)の概要」については[こちら](#)を御覧ください。

## ■ 報告-4 平成29年度「学校教育の重点」について

(事務局から)

- ・ 京都市の学校教育の方針である「学校教育の重点」について、平成29年度は、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」、また、そのために「どのように学ぶか」まで踏み込んでいる国が定める学習指導要領の改訂案をできる限り反映させた内容となっています。また、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」ことを目指した「社会に開かれた教育課程」を推進するため、京都市が進めてきた市民ぐるみ・地域ぐるみの教育改革をより一層充実させていくことに言及しています。
- ・ 京都市の目指す子ども像「伝統と文化を受け継ぎ、次代と自らの未来を切り拓く子ども」の実現のため、「自ら学ぶ力」「自ら律する力」を学校・幼稚園全体の教育活動の中で高めることを重視してまいります。
- ・ また、教育活動を着実に推進していくため、「子どもの命を守りきる」「すべての教職員がカリキュラム・マネジメント(※)の視点で学校教育を推進する」など7点の学校運営の柱を設け、保護者・地域と連携しながら「社会に開かれた教育課程」を編成していくこととしています。

### ※ カリキュラム・マネジメント

教育の目的や目標の実現に必要な教育内容等を教科横断的な視点で組み立て、評価し、改善するなど、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと。



## ■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

### ■ 閉会 [井上議長]



### ■ 閉会挨拶

在田正秀 教育長から挨拶がありました。

